寄稿　1

高原の村の子どもたち　　香月　博子

帰国してから、周りの人たちに「フィリピンはどうだった？」と、聞かれます。私は「寒かったよ」と答えています。
ミンダナオは赤道に近く、暖かいはずのフィリピンなのに・・・。
寒いと聞いていましたが、赤道に近いところだからと楽観していました。ところが訪ねたアトモロックもラワンも 1000 メートル近い高地だったのです。昼間は暑くても夕方になるとダウンを羽織って丁度良い気温になり、夜間ともなると 15℃位になります。

そんな高地の村にあるアトモロックの小学校を訪ねました。私たちが到着すると沢山の子どもたちが車の周りに集まってきました。大きな目を輝かせた可愛い子達です。山の上なのに思ったより広い運動場としっかりした 2 棟の校舎がありました。教室は充分あるのですが先生が雇えないので 3 つの教室に分かれて複式学級で学んでいるとのことでした。1 クラスに 50 人以上、どこからこんなに沢山の子どもたちが集まってくるのか不思議なほどの人数です。教室を訪ねると、ベテランの先生の指導で熱心に勉強していましたが、教室の暗さに驚きました。これでは目が悪くなりそうで心配です。

朝礼は上級生が前に出て、子どもたちだけで自主的に体操や国歌？などをこなしていました。まだ3歳位にしか見えない体格の子達も（フィリピンは 4 歳からの幼稚園も義務教育です）ちゃんと上級生に見習って整列をしたり、体操をしたりしているのには感心しました。

その日は、週1回の給食の日で、学校の裏庭では当番のお母さんたちが、大鍋にはやと瓜やかぼちゃなどの野菜とビーフンの入っているスープを煮込んでいました。お昼になると子どもたちは、家から持参したお皿やボウルなどの容器を持ってかまどの前に並びます。それをたっぷりと盛り付けてもらい、三々五々あたりの草の上に座り楽しい給食の時間です。小さい子も大人の手を借りることなく、しっかりと食べていたのが、とてもいじらしく可愛く思えました。時々、こぼしたりしていましたが、犬（地域のアイドル？）の格好の餌になります。なんとも合理的です。

2 日後に訪ねたラワン村では水道工事完了の引渡しの集会が開かれ、完成した貯水槽の上に新鮮なヤギの血を注ぎ完成の祈りがささげられました。もちろんその貴重な肉は私たちをもてなす食材として饗され、美味しく頂きました。その後、沢山の村人たちのお腹を満たしました。

その後の集会ではマノボの女性たちが代わる代わるみんなの前で、水道ができてどんなに良かったかということを、スピーチしていました。水道ができたお陰で下痢によって命を落とす子どもが、いなくなったということでした。

今回の訪問ではミンダナオの女性が社会的に活躍していることも、とても印象に残り、「かわいい子供達、またそれを支える母親たちを応援したい。」と、改めて思いました。

寄稿　2

思い出に残る　　村々・・・　　藤川　千容

たくさんの場所や村を訪問して見てどの村も一生懸命に活動していますし、どこもが心に残るところでした。

その中でラワン村は、州都イスランから 2 時間ほど車で山道を走り、そのあと車を置いて歩くしかない辺境の村でした。迎えに来てくれた村の人の話では、前夜の雨で予定していた道はとても私たちは歩けないだろうということで違う道を選んだそうですが、それでも、ぬかるみに足をとられそうになりながら進み、小さな川も靴を脱いで渡ります。心地よい天気と豊かな自然の中、もろこしの畑などを遠くに見ながら1時間半ほど上がっていくとラワン村が見え、3年前に植えたというゴムの木が2m50cmほどに育っていました。しかしまだ細くて樹液を採り収入を得るまでには年月がかかるそうです。

ここでは他に水道事業として水源から村に引いた水道があり、共同水汲み場が数箇所できていたので蛇口をひねってみましたが水が出ません。聞けばいつでも水が出るようになって子供たちが遊びに使ってしまうから、井戸の元を止めているとのことでした。身近に使えるようになると、水の無駄遣いをしないよう、今までは考えられなかった注意も必要になるようです。翌日はこの事業の引渡しをすることになっていて、その日はセルダさんの家に泊めていただきました。夜は外灯な